

地域おこし協力隊活動報告

『登別市地域おこし協力隊』として着任し、熱いハートとアイデアを持って地域や行政と協力しながら活動する協力隊員のこれまでの活動内容を紹介します。

登別活性化・関係人口コーディネーター

新村 のりこ

関係人口の拡大・創出の取り組みとして、今年で4回目となる『カルルス温泉文化祭×LOPPIS』をカルルス温泉で開催しました。

そのほか、成田山瀧泉寺で『朝の寺子屋』を月に1回程度実施したほか、登別地区を盛り上げるイベント『ザ・フライドフード・フェスト』の開催にも協力しました。



国際交流プロジェクトマネージャー

蔣 静文

市内中学生を対象にしたデンマーク王国やアメリカ合衆国サイパン市への中学生派遣交流事業で事前・事後研修を担当し、英会話の練習や現地での英語プレゼンテーション発表の指導、研修報告書の作成支援などを行いました。

また、多文化共生の推進の取り組みとして、多文化共生サロン『しょう会話』やのぼりべつ日本語サロン『のぼここ』を実施したほか、外国人サポートワンストップ窓口で市内外国人の市役所での手続きを英語と中国語を用いて支援しています。



登別地区にぎわい創出プレイヤー

渡部 和

登別地区を中心とした地域イベントに携わりながら、登別市を訪れる外国人観光客のインタビュー動画を撮影し、外国人観光客の生の声と登別の新たな魅力をSNSでアピールしています。

この他にも、登別地区の飲食店を対象とした英語教室を開催して国境を越えた賑わい創出を目指しつつ、自身の起業では外国人観光客も視野に入れたお店づくりを目指して活動しています。



上山 杏奈

登別地区を中心に、プラントベースの料理教室を定期開催し、野菜を中心とした献立の作り方や日常に取り入れやすいアレンジレシピを発信しています。

また、SNSによる情報発信や、地域イベントでの運営協力・出店を通じて地域の方々に自身の活動を知ってもらう機会を広げ『身体にやさしい、プラントベースをテーマにしたおむすび屋さん』をコンセプトに、登別駅前での起業を目指しています。



IT化促進マネージャー

清水 元輝

子どもから高齢者まで、地域の方々にITやAIを身近に感じてもらうための活動を行っています。子どもたちには、AIを使って自分でデザインを考え、そのデザインをTシャツやボトルなどのグッズとして実際に形にするなど、楽しみながらAIの使い方を学べる機会をつくっています。

また、高齢の方を対象に週1回、スマートフォンの基本操作やLINE、写真、便利なアプリの使い方などを、一人一人に合わせて分かりやすくサポートしています。

そのほか、地域の事業者や団体へのSNS・AI活用、デザイン制作、デジタルサービスの導入支援なども行い、ITを地域の暮らしや仕事に役立ててもらおうことを目指しています。



佐藤 昌樹

日本工学院北海道専門学校の情報システム科に入学し、ITの知識・技術を習得しながら、地域情報をSNSなどで発信しています。

卒業後の市内でのITに関連する起業に向け、いくつかの資格試験に合格し、現在も新たな資格取得に向けて勉強中です。学業が活動の中心となっていますが、SNSでの積極的な発信もあり、TikTokのフォロワー数は1万人を突破しました。



退任した隊員

文化・スポーツ推進コーディネーター 岡田 航汰

文化・スポーツ振興財団で、地域クラブ事業の入会退会、同財団イベント事業の事務、ホームページの管理などを実施しました。

また、今年3月には雪球の代わりにソフトテニス用のゴムボールを投げ合う新スポーツイベント『登別屋内雪合戦』を企画・開催しました。



地場産品等PRマネージャー 増田 好希

令和7年度からの活動では『食』を通じて地域活性化とエゾシカの資源化に特に注力しました。地域の事業者と連携して企画・運営した『のぼりべつ肉フェス』では、多くの方に登別の食の魅力が直接発信し、地域の賑わい創出に貢献しました。

また、長年有害鳥獣とされてきた存在から『地場産品としてのエゾシカ』へと価値を高めるため、既存の解体処理施設を承継して『イブリテック株式会社』を設立しました。狩猟から解体、商品開発、全国への販路拡大までを一貫して手掛け、今後は法人として登別の新産業創出に貢献していきます。



ふるさとPRコーディネーター 須藤 睦子

ふるさと納税公式Instagramで返礼品情報を発信しつつ、自身の事業として『Melcicle Finds』を立ち上げ、ペットフードの開発を行うとともに、フリーズドライのトッピングフードや安全安心な商品をオンラインショップや道内のイベントで販売しています。

活動の中で登別のドッグラン『もなかの森』や、『NPO法人北海道災害救助犬』からお声がけをいただき、JKCアジリティ大会などにも出展しています。また、こういったつながりから、オンラインショップでの売上の一部を『北海道災害救助犬』へ寄付し、救助犬に対する支援を行いました。

